

## 引揚げ時の苦勞

広島県 加胡川 俊 徳

八月六日、急遽ソ連軍が北滿地区一体に大攻撃を加え、空陸両面から関東軍の手薄な所に徹底的な打撃を与え、右往左往する在留日本人に多くの犠牲者が続出しているとの情報が流れていた。

外地で聴く終戦の詔書は、悲しいのか悔しいのか何とも言えなかった。無条件降伏、滿州国政府解体、赤ん坊同然の日本人は唯々居留民団にすぎない状況下におかれってしまった。

八月二十日を過ぎると八路軍が入城し、地方行政機関の接収、日本軍の武装解除、次にソ連軍の入城となって日本軍を捕虜として次々北滿ヘシベリアへと輸送を始めた。

八月二十二日から二十五日の間、暴民が発生、日本人に対し「我々中国の地において得たものは一切持ち出す

ことは許さない。速やかに物資財産を放棄し撤退せよ」罵りながら鍬、鎌、熊手などを持ち、爆竹を鳴らして日本人を包囲した。

私は無我夢中で日本刀を振りかざし暴徒の真っ只中に突っ込み、滿州国警察隊の発砲などで五人の日本人犠牲者を出したのみで大暴徒を撤退させた。

八月三十日から九月二日まで八路軍とソ連軍から官公庁、日本人法人会社などの建造物の殆どが接収された。

その後、日本人に対し何千人という暴徒が襲ったので屋外に着の身着のままに難を逃れ、公園や小、中、女学校に逃れ不安そのもので、暴徒は日本人の家庭に侵入し食糧や物資を奪い放題の実情を見せつけられた。

政策の変わるたびに戦闘行為が起こったが、蔣介石の中国正規軍が入城し始めてからは八路軍やソ連兵は東北方面に後退していた。

しかし、すべての日本人は狩り出されて道路の清掃、荷造り、荷運び、家屋補修、道路や橋梁の修理並びに架設の強制就労であった。しかも戦犯探しにあい軍人、官吏、会社社長等を投獄し日本人大掃討が行われた。その

間、軍人、高官の両夫人の自害があつて悲報が流れた。食うために男は苦力（労働者）、女は小物品の売り歩き、僅かな収入でその日暮らしの日本人の姿である。

十一月、蒋介石夫人（宋美齡）が入城し、日本人の苦力が清掃している姿を大通で米国官憲とともに巡視された。そして宋美齡夫人から高粱米五合ずつ日本人難民に支給されたのは忘れられない。宋美齡夫人から来春（昭和二十一年）頃は日本へ帰還可能の指示もあつた。

くわしいことは知る由もないが、日本人同志が相互扶助を唱え始め、日本人で拠託金を出した人には帰還後日銀からその額の返還が可能ということになり、特に財閥から供託金が寄せられ、私どものような難民生活の糧となり、最後の引き揚げ金一人当たり一千元に限り日本に持ち帰ってもよいというのに無一文だった引揚者の喜びは涙なくして語れない事実である。

あわただしくなつた。私は日本帰還団第一大隊長として一千三百人を引率しコロ島を発つた。このとき三人は乗船を拒否され気の毒で後ろ髪の引かれる思いをしたが、船で亡くなつた方を水葬にして冥福を祈つた。

私の長女も満州の地に埋葬して帰つた。残念でならない。今度幸せな境地に生まれ変わってくることを念じている。

## 引揚げ者の体験

山形県 森谷 フサ

私は、昭和十九年十月、縁あつて、ハルビン郊外にある防疫給水の特殊部隊に軍属として勤務している主人と結婚しました。

渡満は、輸送のままならなかつた当時なので、二十年四月、下関に出張でこられた同僚につれられて、小さい行李一つの荷物をもって、現地についたのは、四月下旬でした。

渡満まもなく、在満東郷国民学校に出るように願われて、五月十日から、勤めました。

部隊関係者の子供だけが入る小さい学校で校長は軍人、ほか数人の教員で運営されていきました。右も左もわ